

## 1 技術・家庭科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

本学校園技術・家庭科における「問い」とは、よりよい生活を目指していく中での、今の自分や将来の自分にとっての課題や、その課題を解決するための方法を考えることであると考えます。つまり、課題を見いだす『問い』や課題解決に向けた方法を探る『問い』である。そして、「問いをもち」とは、子どもが主体的にどのようにすれば生活をよりよくすることができるか多面的に考えていくことであると定義し、このような問いをもち追求する姿を次のようにとらえている。

生活の中の課題を多面的にとらえ、習得した知識や技能を活用し、自ら解決しようとする姿

これまでの実践の中で、子どものふりかえりに次のような感想が見られた。

【小学5年生家庭科「家族にふるまうみそ汁を考えよう」のふりかえりより】

・今日は初めて一人でみそ汁を作ってみて、ちょっときんちょうしたし、心配したけど、しっかりとできたのでよかったです。具も大きすぎないか分からなかったけど、ちょうどよかったです。でも、みそを一気に入れてしまってちょっとからくなってしまいました。なので、家で作った時には少なめに、味見をしながら入れました。家族もおいしいといってくれてうれしかったです。(児童A)

【中学3年生家庭分野「地域の食材を使った郷土料理の調理会食実習」のふりかえりより】

・計画のときはよかったと思ったが、作ってみると計画どおりにはいかないなあと思いました。味付け、見た目もとてもよかったとは言い難いものとなり残念でした。もっと計画からしっかり考えておけばよかったと思えました。(生徒B)

【中学2年生技術分野「理想的な教室机の材料を検討する中で、使用目的や使用条件の他に社会的・環境的・経済的側面を踏まえて材料について考えた学習」のふりかえりより】

・「使う上で適しているか」ばかりでなく、「使い続けるとどのような変化や影響があるか」や「使えなくなっからどう廃棄するか」という視点もふくめて考え、今後の生活にいかしたい。(生徒C)

これらは、「一人一人が問いをもち追求する姿」が具体的に現れたものである。

小学校家庭科、中学校家庭分野のふりかえりでは、みそ汁や郷土料理の調理に対して、味付けや具の切り方、見た目について多面的な課題を見だし、解決に向けて動き出そうとする姿が見られる。また、中学校技術分野では、使う場面のみならず、使用後の材料の適正についても検討しようとする姿が現れている。このように、生活の中の課題を多面的にとらえ、習得した知識や技能を活用して、日常生活の中で実践したり、今後のよりよい生活につなげていったりする姿を目指して指導していきたい。

## 2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

一人一人が問いをもち追求する力を育成するためには、一人一人が課題に対して「問う」ことができる力を育てる必要がある。「問い」の質を高め、生活の中の課題を多面的にとらえ、今後生活の中で直面する様々な課題に対し、「問う」力を育成する。「問う」力の高まりが追求する姿にもつながっていくと考えている。

そこで、本学校園技術・家庭科では、以下の手立てを実践していく。

○ 課題設定の工夫

○ 課題に対する「問い方」の工夫

○ 子どもが考えを広げたり深めたりするための教師のはたらきかけ

### (1) 課題設定の工夫～子どもたちの学びの核となる課題～

子どもたちがよりよい生活を目指す中で、課題を多面的にとらえるためには、その課題が子どもたちにとってより必要感の高いものでなければならない。子どもたちの思いや願いに添った課題にするために、普段の生活を見つめ直し、考えたことや気付いたことをしっかりと出し合い、子どもたち自身が課題を見いだしていくようにする。提示された課題に対して、なぜそれが課題なのか、その課題の本質は何かなど、課題を吟味する時間を十分に確保して、課題解決に向けて核となる課題にしたい。

### (2) 課題に対する「問い方」の工夫～課題を多面的にとらえる問い～

課題に対して視点を明確にした「問い」をもち、学び合うことで、「問い」の質を高め、課題に対して、様々な要素に基づいた思考ができるよう発達段階に応じて学習活動を構成する。

小学校段階では、課題に対してその解決に向けてどのような要素（内容や条件）が必要となってくるか、多面的な見方や考え方ができるようにしていく。例えば、「生活に役立つ物を作ろう」という課題があった場合、何を作るか、どのような形や大きさにするか、どのように縫っていけばよいかなど、課題解決に向けた要素が挙げられる。その中で「問い」を明らかにし、その問いの中から、課題を解決していくためには今の自分ほどの「問い」を追求していけばよいか選択する場面を設けて、学習を展開していく。

中学校段階では、課題に対してその解決に向けてどのような要素が必要となってくるか見いだした上で、各要素間の相互依存性や関連性に着目して、多面的な見方や考え方ができるようにしていく。例えば、技術分野の製作で材料を選択する場合、強度や加工の難易度などの特徴を考えた上で、プラス面とマイナス面、時間経過による影響などを踏まえて検討する。課題を解決するための「問い」を選択するだけにとどまらず、相互の依存性や関連性に着目して、批判的視点に立って考えたり、作品全体と各要素の関わりを考えたりして、課題の解決に向けてより質の高い「問い」が導き出せるように学習を展開していく。

### (3) 子どもが考えを広げたり深めたりするための教師のはたらきかけ

子どもたちの「問う」力を高め、それぞれの考えを広げたり深めたりするために、なぜそのように考えたのか、どうしてその方法がいいのかなど「掘り下げる」はたらきかけを行い、子どもたちの「問い」を明確にしていきたい。また、子どもたちが課題の解決に向けて、様々な要素の依存性や関連性に着目するためには、教師から「提案する」はたらきかけが重要となる。子どもたちが導き出した要素を取り上げ、依存性や関連性などの考える視点を提案することで、質の高い「問い」を導き出していきたい。このような手立てを通して、子どもたちが生活の中で課題を多面的にとらえ、課題に対する問い方を身に付けながら、よりよい生活を目指して工夫し創造できる力を育てていきたい。(文責 井上 富美子)

【参考文献等】

- ・ Peter M. Senge 「学習する組織—システム思考で未来を創造する」英治出版2011
- ・ 内田有亮 西本彰文 田口浩継 「技術科教育におけるシステム思考の導入について」
- ・ 荒井紀子 「実践的推論プロセス」